

「なっちゃんは、ほっとけない」 第4話

水瀬真理佳

へ登場人物へ

本田夏海（16） 本田家の長女、高校2年生

西山凜（16） 夏海のクラスメイト

藤井拓海（16） 夏海のクラスメイト

橘龍太郎（16） 夏海のクラスメイト

佐野聖也（16） 夏海のクラスメイト

山本愛流（16） 夏海のクラスメイト

鎌田（18） 黒龍会のリーダー

中村康太（36） 夏海の担任

小林（16） 夏海のクラスメイト

佐藤（16） 夏海のクラスメイト

山田（16） 夏海のクラスメイト

山本陽子（34） 愛流の母親

松本里帆（17） 夏海の親友

西山秀樹（46） 凜の父親で入谷高校の校長

滝口（32） 刑事

○入谷高校・2年間A組・中（朝）

既に登校している何人かの生徒が、教室の後方でザワザワする。

クラスメイト1「（小声で）なんでこの時間に西山たちがいんだよ」

クラスメイト2「（小声で）まさか授業受ける気か？」

クラスメイト3「（小声で）優等生に脅されたんじゃね？」

中村「おはよー」

担任・中村もいつも通り教室に入ってくるや否や、最前列のメンバーを見て動きを止める。

そこには夏海だけでなく、その横に聖也、拓海、龍太郎、そして凜が席に着き、怠そうながらも教科書を開いている。

中村「・・・すまん、教室間違えた」

と、回れ右をして出て行こうとするのを夏海が呼び止める。

夏海「中村先生！」

拓海「間違えてないですよ」

聖也「おはよ！ 中セン！」

と、手を挙げる。

中村「この時間に教室にいてだけでも驚きな

のに、教科書なんか開いて……お前らまさ

か授業受けに来たわけじゃないよな！？」

と、混乱。

龍太郎「教師のセリフとは思えないな」

と、ケラケラ笑う。

聖也「中セン、オレ大学受験するから！ ち

ョー手えかかると思うけど、最後まで諦め

んなよ！」

拓海と龍太郎「お前がな」

と、同時にツッコむ。

聖也「アハハ、そうだな」

コントのようなやりとりに夏海も笑う。

中村はまだ状況が飲み込めない様子で

ポカンと口を開けながら、

中村「もしかしてこれは俺の夢か？ 俺はま

だ寝てんのか……？」

と、自分の頬を引っ叩く。

聖也「この間体育祭でリレー走って、オレはやっぱ陸上が好きなんだって思ってたさ。だから陸上に強い大学入って、また走ることにした！ なっちゃんとコイツらが背中押してくれたんだ」

夏海「これが志望校のリストと、そこをゴールに設計した対策プランなんです。ぜひ先生のアドバイスをお願いします！」

と、資料を渡す。

中村「わ、分かった……」

と、まだ信じられない様子。

そして聖也は教室の後方にいるクラスメイトの方を振り向き、

聖也「オマエらにも色々助けて欲しいんだ！ オレほんと勉強できねえからさ。よろしく頼む！」

と、頭を下げる。

「なんだよそれ」「俺らにカンケーね

「し」という声が聞こえる中、

山田「……いいぜ。お前のおかげで体育祭のリレー優勝できたからな。借りは返す」

という一言をきっかけに、クラスの流れが徐々に変わる。

小林「どうやらオレの頭脳が必要らしいな」

と、ドヤ顔をする小林に対して、

佐藤「お前はどうか考えても佐野と一緒に教えられる側だろ」

と、ツツこんで教室が笑いに包まれる。

そんな中一人、山本愛流（16）だけ

がその空気を壊すように立ち上がる。

愛流「……くだらねえ。仲良しごっこは外でやれよ」

と、教室を出て行く。

夏海、その姿を最後まで目で追う。

そんな夏海を見て、

凜「……どうかしたか？」

夏海「今のってもしかして山本愛流くんです

か？」

聖也「あゝそんな名前だったような……今年入って初めて見た気がする」

拓海「同じクラスだったんだな」

龍太郎「てかなっちゃんなんで知ってんの？」

夏海「中学が一緒だったんです！」

聖也「マジ？　アイツ三年の鎌田っていう黒

龍会のボスの下で、色々ヤバイことやってるってウワサ」

夏海「えっ……！？」

龍太郎「この学校で黒い噂聞かないやつの方が珍しいけどな」

夏海「中学の時はそんな感じじゃなかったと思うんですけど……」

と、心配の表情。

凜「……やめとけよ」

夏海「……！？」

凜「何かあったんじゃないか、とか気にしてんだろ」

凶星の夏海はゴクリと唾を吞んで黙秘。

龍太郎「なっちゃん。気持ち分かるけどや

めときな」

拓海「君子危うきに近寄らず、触らぬ神に祟りなし、てな」

聖也「であー拓海の呪文シリーズ」

と、顔を顰める。

夏海「・・・はい、肝に銘じます」

その時、夏海のスマホにメッセージが届く。

メッセージを見て口角を上げる夏海。

○カフェ・店内（夕方）

夏海が店内に入ると、先に来ていた親友・松本里帆（17）が立ち上がる。

里帆「夏海ー！ 会いたかったー！」

夏海「私もだよーりいちゃん！」

と、熱くハグする二人。

里帆「入谷はどう？ やっぱヤンキーばっか？」

夏海、生き生きと怒涛の勢いで話し始める。

夏海「西山くん、藤井くん、佐野くん、橘くん——見た目は派手な人が多いけど、みんな優しく、いい人たちだよ。最初は授業受けるの私だけだったんだけど、最近佐野くんが大学目指すことになってからクラスみんな協力しようってなってね……ってごめん、私ばかり……」

と、我に返って恥ずかしそうにする。

里帆「いいの、もっと話してよ！ 夏海が楽しそうで安心した」

夏海「ありがとう！ そういえばりちゃん、山本くんって覚えてる？」

里帆「山本藍流のこと？」

夏海「そう！ 山本くんも入谷にいて、しかも同じクラスだったの！」

里帆「そっか……じゃあ高校はとりあえずちやんと行ったんだね」

夏海「それどういふこと……？」

里帆「山本くんの家色々あったんだよ。お父さんがアル中のDV男で、お母さんとずっ

と暴力振るわれてたんだって。やっと離婚して離れられたと思ったら、お父さんの借金背負わされて、お母さんが朝から晩まで働き詰めで家計も厳しうだった」

夏海「全然知らなかった……」

里帆「夏海も大変な時期だったから無理もないよ。それで山本くんかなり荒れて、地元の危ない先輩とずっとつるんでたみたい」

夏海「今も三年の先輩と良くないウワサがあるんだって……」

里帆、夏海が何を考えているか察する。

里帆「どうかしようなんて思っちゃダメだからね？ 冬馬が知ったら大騒ぎだよ」

と、釘を刺す。

夏海「……だね！ 学校行かせてもらえないくかかるかも。既に何度もお説教されてるか」

と、笑いながら同意する。

里帆「冬馬も昔はイタズラ好きのヤンチャ小僧だったのに、今ではしっかり者のお兄ち

やんだもんね」

夏海「わんぱくなところは春樹にすっかり受け継がれてね」

里帆「なんか話聞いてたら久しぶりに二人に会いたくなってきた」今度遊びに行ってもいい？」

夏海「いつでも来て！冬馬たちも喜ぶから」

○入谷高校・廊下（後日）

夏海が一人で歩いていると、前から愛流も一人で歩いてくる。

夏海 M「挨拶するだけ、挨拶するだけ」

と、言い聞かせる。

夏海「お久しぶりです、山本くん。中学で一緒だった本田夏海です」

愛流「……学年一位の優等生が、なんでこんなところなんだよ」

夏海「色々あって、四月から転校してきました」

愛流「……そりゃ災難だったな」

と、夏海の横を通り過ぎる。

夏海 M 「挨拶だけ、挨拶だけ……」

と、心の中で唱えていたのに、つい勝手に口が動いてしまい、

夏海 「あの……！」

と、愛流を呼び止める。

愛流 「へ面倒そうに……んだよ」

夏海 「……何か困ってることがあれば言っ

てください！ 私にできることなら、力にな

るので！」

愛流 「いきなりワケ分かんねえ」

と、歩いて行く。

しかし夏海はその後ろ姿に向かって、

夏海 「いつでも話聞きますから！！」

と、叫ぶ。

愛流 「チッ……」

と、舌打ちして歩いていると、曲がり

角の所に三年の鎌田が立っている。

愛流 「鎌田サン……！ お疲れっス」

鎌田 「アイルお前、あの女と知り合いか？」

愛流「本田ですか？　まあ、一応……同中で
した」

鎌田「へえ。あの女、お前のクラスの西山
が可愛がってるやつだろ？」

愛流「……みたいすね」

鎌田「俺ア、西山に用があんだよ。アイル、
あの女使って西山を誘き出せ」

愛流「……ッス」

○アパート・山本家（夜）

愛流が気怠げに帰ってくると、ミニ丈
のスカートを履いた母・山本陽子（3
4）が慌ただしく身支度を整えている。

部屋の中には服が散らばり、テーブル
には空のアルコール缶や、カップラー
メンのゴミが放置されている。

陽子「毎日毎日夜遅くまでどこ行ってんの。
アンタまさかまだヤバイ先輩たちとつるん
でんじやないよね？　警察の世話になるよ
うなことはやめてよ？」

愛流「っせーな。アンタに関係ねーだろ」

陽子「ご飯は？」

愛流「・・・」

陽子「はあ……そこに金置いといたから」

陽子が指差したテーブルには五百円玉が置かれている。

愛流「五百円なんて弁当も買えねーよ。ほん

と何も知らねーのな。そんなんだから変な

男と結婚したんだよ」

陽子「ちよつと！アイツのことは今関係な

いでしょ？」

愛流「ババアのくせにそんな格好して恥ずか

しくねーの？」

陽子「こっちはアンタのために働いてんの

に！」

愛流「じゃあ俺のことなんか産まなきゃ良か

っただろ！頼んでねーよ！」

陽子は大きくため息をつく。

陽子「へ嫌味を込めて」そういうところアイ

ツにそっくり」

愛流「自分があんなクソ男とヤッて勝手に産
んだくせに、いちいち恩着せがましいんだ
よ。育てる能力もないくせに、ノリで子供
作んな！」

愛流は引き戸を強く閉めて部屋にこも
る。

○同・愛流の部屋の中（夜）

陽子の声「ちよっと愛流！」

陽子が扉をどんどん叩くが、愛流は苛
立ちを抑えるようにヘッドホンをして
外界の音を遮断する。

※ ※ ※

（フラッシュ）

鎌田「俺ア、西山に用があんだよ。アイル、
あの女使って西山を誘き出せ」

※ ※ ※

（フラッシュ）

夏海「……何か困ってることがあれば言って
ください！ 私にできることなら、力にな

るので！」

※ ※ ※

愛流は鎌田と夏海の言葉を思い出し、

愛流「……どういつも、うっせえよ」

と、こぼす。

○入谷高校・下駄箱（夕方）

夏海が帰ろうと靴を履き替えていると、

愛流がやってくる。

夏海「山本くん……！」

愛流「……なあ。お前にできることならなん

でも力になるつつたよな？」

夏海は愛流が頼ってくれたと思って嬉

しくなる。

夏海「はい！なんでも言ってください！」

愛流「俺の先輩が西山に用あんだよ。お前西

山に気に入られんだってな。だからアイツ

と先輩を繋いでくれ。簡単だろ？」

夏海「西山くんと……？分かりました！」

任せてください！」

愛流「じゃあ今からちょっと顔貸せ。先輩のこと紹介する」

夏海「はい！」

○立体駐車場・屋上（夕方）

愛流に連れられ、今は使われていない
廃れた立体駐車場にやってきた夏海。
屋上まで上っていくと、そこには黒龍
会のメンバーと思われる柄の悪い男た
ちが待ち構えている。
その中心で、一人ソファに座っている
男は黒龍会総長の鎌田。
愛流「鎌田さん、連れてきました。西山の女
です」

と、夏海を鎌田に紹介する。

夏海「（礼儀正しく）はじめまして、本田夏海です」

鎌田「じゃあ、今すぐここに西山呼んでもら
おうか」

夏海「西山くんとは話をするだけですよね：

：？」

と、念を押す。

鎌田「ああ。たっぷり、じっくりな」

夏海は鎌田の言葉にニヤニヤする周りの男たちを見て、ここに凜を呼んだらどうなるか、鎌田たちの狙いを理解する。表情を引き締めて、

夏海「・・・ごめんなさい、山本くん。こういうことなら、私は協力できません」

と、回れ右をして帰ろうとするが、

愛流「だろうな。でももう遅い」

そう言って愛流は夏海の制服のポケットからスマホを抜き取り、鎌田に投げる。

夏海「返してくださいっ！」

愛流は鎌田の方へ行こうとする夏海の手首をロープで縛る。

夏海はロープから手を抜こうと奮闘するが、皮膚が擦れるばかりでどうにもならない。

鎌田「アイル。その女そこにぶち込んどけ」
と、塔屋を指差す。

○カラオケ・個室（夕方）

マイクを片手に熱唱する聖也と龍太郎。

拓海は小説を読みながら二人の歌に合
わせてタンバリンを叩く。

そしてスマホで二人の様子を動画撮影
している凜。

そこに、夏海から着信が入る。

凜、個室を出て夏海からの電話に応答
する。

凜「夏海、ちょうどよかった。今拓海たちと
カラオケいんだけど、夏海も来いよ」

しかしスマホの向こうからは知らない
男の声がある。

鎌田の声「へえ、楽しそうだな。俺もまぜろ
よ」

夏海のものではない声を聞いた瞬間、
凜から殺気が溢れ出る。

凜「……（怖い声で）夏海に代われ。今すぐ」

鎌田の声「おゝコワ。へ夏海に向かって」ほ

ら西山が声聞きたいってよ」

夏海の声「んーんっ！ んーん

っ！」

口を塞がれているのか、夏海がなんと

言っているのかは分からない。

凜「……テメエ、覚悟しろよ」

鎌田の声「待ってるぜー西山ア」

電話を切った凜が個室に戻ると、聖也

たちも何かを察して歌うのをやめてい

る。

拓海「何があった？」

凜「……夏海が拉致られた」

それを聞いて拓海たちに緊張が走る。

龍太郎「行こう」

と、立ち上がるが、

凜「お前らはここにいろ。アイツらの目的は

俺一人だ」

凜はそう言って部屋を飛び出していく。

拓海「おい、凜……！」

聖也「オレらだけじつとなんてしてらんねえ

よ！」

龍太郎「とは言っても、俺らが行ったらなっ

ちゃんがヤバいのかも」

拓海「……あの人に連絡するか」

と、スマホを出す。

聖也「あの人？」

聖也と龍太郎は拓海のスマホを覗き込

む。

聖也「ああ！」

龍太郎「その手があったか！」

○立体駐車場・屋上・塔屋（夕方）

屋上の塔屋に閉じ込められている夏海

と愛流。

夏海は脱出を試みるが、非常階段の扉は鍵がかかっていて他の階への移動もできない。

愛流は床に座り、夏海を冷ややかな目

で見張る。

愛流「ムダだよ。大人しく西山が来るの待ってろ」

夏海「どうしてこんなことを……？」

愛流「悪いな。本田に恨みはねーけど、でもお前のその『頑張ればなんでもできる』みたいなイイ子ちゃんなところ、昔からちょっとウザかった」

夏海「……もしそう見えてるなら良かったです」

愛流「は……？」

夏海も愛流の隣に並んで座る。

夏海「頑張ればなんでもできる……そうやって自分に言い聞かせてないと、不安で押し潰されそうになるんです。私がしっかりして家族を守らないといけないので……毎日必死です」

と、夢げに笑う。

愛流はハッと鼻で笑う。

愛流「やっぱいい子ちゃんはちげーわ……自

分は親ガチャハズレたんだと思ってたけど、俺みたいな子供が生まれてハズレ引かされたのはババアの方だったのか」

と、自嘲するように言う。

夏海「ガチャ：：？」

愛流「親も子供もお互い選べねーだろ？　だ

からガチャ」

夏海「：：（気まずそうに）私は山本くんが

思ってるほどいい子ちゃんじゃないですよ」

愛流「いいってそういうの。優等生は親に反

抗とかしたことねーだろ」

夏海「：：『好きでお母さんの娘に生まれて

きたわけじゃない。お母さんなんて大嫌

い』」

と、呟く。

愛流「：：急になんだよ」

夏海「中学一年生の時、お母さんに向かって

叫びました。これがお母さんと最後の会話

になるとも知らずに：：」

愛流は何も言えなくなる。

夏海「最後だって知ってたら絶対にあんなことと言わなかった……もっと他に伝えるべきことがたくさんあったんです……」

と、遠くを見つめる。

愛流「……本田が本気でそんなこと思うやつじゃないことは、母さんが一番分かってるんじゃないの？」

愛流からの励ましに、夏海はニツコリ笑う。

夏海「この話、誰かに話したのは初めてなんです。聞いてくれてありがとうございます。」「

愛流「別に……」

そこへ外から扉が開き、鎌田が入ってくる。

鎌田「立て」

と、夏海のロープを掴んで立たせるが、それを愛流が横から止める。

愛流「西山は呼んだんだし、もう本田はいいっすよね」

すると鎌田は愛流の髪の毛を鷲掴んで

壁に何度も強く打ちつける。

鎌田「誰に向かって口聞いてんだ？ あ、

あ！？」

愛流の切れた額からは血が流れ、床に倒れこむ。

夏海「山本くん！！」

と、愛流に駆け寄る。

さすがにやりすぎだと思った部下たちがおそるおそる鎌田に声をかける。

男1「鎌田さん、さすがにマズくないっすか

：：？」

男2「かなり血出てますけど：：」

鎌田「テメェらもあありたいか？」

と、睨みつけると男たちは縮み上がる。

そして鎌田はトドメを刺そうと愛流に近づくが、その前に夏海が立ちはだかる。

愛流「：：バカ、やめろ」

愛流は朦朧とする意識の中夏海に向かって声を振り絞るが、夏海は鎌田が目

の前に来ても一步も引かない。

鎌田「鎌田、夏海の顎を掴んで上を向かせる。

鎌田「へえ、大した度胸だ。さすが、あのバ

ケモンのお気に入りなだけあるな」

夏海「へ怒りを孕んだ声で」もし西山くんの

ことを言ってるのなら訂正してください。

西山くんは化け物なんかじゃありません」

鎌田「鎌田、迷いなく言い切る夏海をクスク

ス笑う。

夏海「何がおかしいんですか？」

鎌田「なんだお前、知らないのか。西山が中

学で何したのか」

夏海「・・・」

鎌田「アイツはそこらへんにいるただの不良

じゃない」

夏海「・・・どういう意味ですか？」

鎌田「アイツはな、教師殺しかけたんだぜ」

夏海「なに、言ってるんですか・・・？」

と、さすがの夏海も一瞬動揺する。

その時、下からバイクのエンジン音を

鳴らして凜が屋上までたどり着く。

鎌田が夏海の肩を乱暴に掴んで出迎える。

鎌田「やっとお出ましか。待ちくたびれたぜ」

凜「……夏海を離せ」

鎌田「可哀想に。お前が俺のことシカトしな

きゃこんな目に遭うことはなかったのにな

ア？」

と、夏海の髪の毛を引っ張って顔を近づける。

凜「夏海……巻き込んで悪い」

と、拳を握り締めながら呟く。

鎌田は下品な笑みを浮かべて部下たちに「やれ」と指示を出す。

夏海「西山くん、逃げて！」

しかし夏海の叫びもむなしく、黒龍会のメンバーが凜を取り囲み次々と殴りかかる。
それでも凜は難なく攻撃をかわし、自分からは一切手を出さない。

鎌田「そんなもんじゃねえーだろ西山凜はよ
お！ この女にも見せてやれよ、教師を病
院送りにした本当のお前をさア！」
その言葉を聞いた瞬間、凜の動きが明
らかに鈍くなり、避け切れずに次々と
攻撃を受けてしまう。
夏海M「なんとかしないと、このままじゃ西
山くんが……！」
夏海は背後に立つ鎌田をチラッと見て
距離感を確認。
そして少し膝を曲げ、鎌田の顎下めが
けて思いつきりジャンプする。
「ゴリッ」という鈍い音と共に夏海の
頭頂部が鎌田の顎下にめり込み、鎌田
が白眼をむいて倒れる。
凜を含め、その場の全員が衝撃的な出
来事に咂然とする。
しかしそれも束の間で、敵のターゲッ
トが凜から夏海に変わり、男たちが夏
海に近づいて行く。

凜「おい、待てよ……まだ終わってねえぞ」

と、地面に這いつくばりながら一人の足首を掴んで引き留めようとするが、あっさりと蹴り払われる。夏海が屋上の錆びきった柵の方に追い詰められたその時、パトカーのサイレンが唸りをあげるのが聞こえる。段々と近づいてくるその音に、黒龍会の面々はどよめき始める。

男1「お前ら、引き上げるぞ」

危険を察知して黒龍会のメンバーがスロープを下っていかうとすると、そこへ屋上まで上ってきた拓海、聖也、龍太郎が立ち上がる。

聖也「ストップ！こっから先は行かせねーよ？」

龍太郎「お前らの迎えはちゃんと呼んでやつたから」

すると制服の警察官が続々と到着して一斉に黒龍会のメンバーを取り押さえ

ていく。

拓海、夏海の元に駆け寄ってロープを
ほどく。

拓海「遅くなってごめん。怪我はない？」

と、聞きながら、夏海の腕に残ったロ
ープの痕に目が留まる。

視線に気づいた夏海は手首を押さえて、

夏海「私は全然平気です。それよりも西山く

んと、あの中に山本くんが……！」

聖也「分かった」

と、塔屋の方へ行く。

一方凜の元には一人の私服警官・滝口
へ32ㄱが近づく。

色付きグラスをかけてガラが悪い。と
ても警察官には見えない。

凜は安心したのか大の字で仰向けにな
る。

滝口「大丈夫か？ 凜」

滝口は心配しているかと思いきや、ど
こか嬉しそうにボロボロの凜の姿をカ

シャカシャとスマホに収める。

凜「発言に対する行動がおかしいんだよチン

ピラ刑事。さっさと手貸してくれ」

と、悪態をつきながらもかなり親しげ

な様子。

滝口「随分派手にやられたな」

と、凜に手を差しのべる。

凜、その手をとって起き上がる。

凜「言っとくけど、オレは指一本たりとも手

出してねえから」

滝口「じゃああれはどう説明するつもりだ？」

と、白目になって伸びている鎌田を指

差す。

凜「あれは……」

夏海「すみません！ 私なんです！」

と、凜たちの元へやってくる。

夏海「他に方法が思いつかなくて、頭突きし

ちゃいました……」

滝口「頭突き！？ アハハハッ！ 君の頭

も痛かっただろ？」

夏海「いえ！ 石頭なので大丈夫です！」

滝口「彼女の石頭に感謝だな」

と、凜の肩を叩く。

夏海は凜のそばにしゃがみこんで、

夏海「西山くん、ひどい怪我……すぐ病院に行かないと」

凜「……大袈裟だな。ただのかすり傷だよ」

凜は夏海と目を合わそうとしない。

凜の青く腫れた目元、血が滲んだ口の

端、ボロボロの制服を見て胸が苦しく

なる夏海。

夏海「なんで抵抗しなかったんですか……！」

西山くんなら……」

と、一瞬言葉に迷う。

すると凜は鼻で笑って、

凜「……自嘲気味に」俺ならやりかえせた
だらって？」

夏海「違います！ 私はただ、西山くんには
自分自身を守って欲しかったんです！」

凜「じゃあアイツら全員病院送りにすればよ

かったよ！ 自分を守るためならいいよ
な？」

気が立っているせいで声を荒げる凜。

揉めている様子を心配して拓海たちも

駆け寄る。

滝口「落ち着け凜。お前言ってること滅茶苦

茶だぞ」

と、凜を宥めようとするが、凜は無言

で立ち上がりバイクでその場を後にす

る。

拓海「おい、凜！ 待てよ！」

拓海の呼びかけはエンジン音にかき消

される。

聖也「だいじょーぶ、気にすんな」

と、夏海を励ます。

龍太郎「なっちゃんを巻き込んだから、色々

責任感じてんだと思う。許してやって」

夏海「誤解されるような言い方をした私が悪

いんです……西山くんが怒るのは当然です

……」

滝口、もどかしそうな表情で、凜が走り去った方向を見つめる。

○西山家・玄関（夜）

凜が外から帰ってくると、父・秀樹が出迎える。

秀樹「遅かったな」

秀樹、凜の姿を見て何か言いたげな表情をする。

凜はまたいつものように、凜の事情も聞かず一方的に説教をされ
ると思い込み、

凜「ああそうだよ！ テメエの息子はまた警察の世話になった！ これで満足か？」

と、投げやりに吐き捨てる。

しかし、秀樹はそんなことを言うつもりではなく、

秀樹「……話は全て聞いた。クラスメイトを助けたんだってな」

今までの秀樹からは考えられない反応

に、自分の耳を疑う凜。険しい顔で秀樹を睨み見る。

秀樹「……傷、見せてみる。病院行くか……？」

秀樹は心配するように凜に手を伸ばすが、

凜「……触んな」

と、その手を突っぱねて自分の部屋にこもる。

行き場を失った秀樹の手は宙に浮いたまま取り残される。

夏海N「この日を境に、西山くんは学校に来なくなった……」

（了）